幻想のアルカナ

名無しの権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想のアルカナ

【Ｎコード】
Ｎ９１０９Ｙ

【作者名】
名無しの権兵衛

【あらすじ】
最強冷酷、クー＆ヤンデレ属性のヒロインがとにかく暴れる物語。チート、ハーレム要素あり、また厨二という単語にピンときた方はぜひいらしてください。
痛々しいくらいの厨二をお送りしますので。
魔術師――それは己が願い、祈りを顕す術を会得した者らの総称。彼らは己が願望を成就させるためならば如何な犠牲をも厭わず、何ものをも顧みない。彼らはそういう存在であるがゆえに。
これはそうした異端者が紡ぐ、幻想の物語――

第零話

夜。

街は寂とした空気に包まれていた。

日中は舗装された道路に忙しなく車が往来し、歩道には人の列が途切れることなく行き交い続ける。そんな人波の喧騒と車の騒音が街中を埋め尽くす栄えた都市は、けれどこうして夜が訪れるとスイッチが切り替わったかのように人が消え、音は途絶え、深閑(しんかん)となる。

――ゴーストタウン。

簡易的な例えでこの街の様相を表現するなら、その言葉がもっとも適しているだろう。

そんな凍りついた街を俯瞰(ふかん)する、天を刺さんとそびえ立つ摩天楼(まてんろう)。その屋上のフェンスの向こう側に、一人の少年が座していた。

風にはためく薄手の赤いロングコート。右頬には血紅色(けっこうしょく)のトライバルタトゥーのような紋様が刻まれており、体にはピアスやネックレス、ブレスレット等のアクセサリが多々身に付けられている。そして煙草。これらを見て、彼が学業に勤しむまじめな少年と思う者など、まず一人としていまい。

事実彼はそうした反社会的な性質を持っており、ゆえにこうしていまも関係者以外立ち入り禁止の屋上へ忍び込み街を一望している。それに対する理由など特にない。敢えて言うなればヒマ潰し。面白そうだからやってみた、というだけ。しかし、それもこうして果たすと途端に飽いてしまう。終えるまでの過程こそ楽しめたものの、やり切ると鬱屈の念が湧き出してくる。

これは女を落とすのに少し似ているかもしれない。落とすまでは夢中になって口説くのに、いざ女が了承すると、今度はこちらが拒絶したくなる摩訶不思議な現象(あれ)。大抵の男は――女もだが――一度くらいは経験したことがあるのではないか。

ちょうど、彼はいまそんな気分に陥っていた。こんなビルの屋上まで来て、一体何をしようというのかと。ただ帰るのが億劫になっただけ。それだけではないのかと。

彼は現在、そうした自虐の念と、そして満たされない己が欲求に飢餓していた。

――と、不意にポケットの中で何かが振動する。携帯だ。彼は億劫そうにしかめ面をしながら紫煙を吐き、やおらそれを取り出して、画面を開く。そこに表示されているのは受信完了の文字。つまりメールだ。

受信ボックスを開いて、いま送られてきたメールを確認。送信者は、知り合いの小娘（ガキ）だった。もうとうに零時を過ぎており、お子様が起きている時間ではないのだが、まあ、いまは春休み中ゆえ調子に乗って夜更かししているのだろう。それは分かる。誰もが共感する感情だ。

だが。

「……、」

苦笑が洩れる。

そのメールには、肝心の本文が書かれていなかった。ただ『事件ですっ！』という好奇心を無駄にくすぐる件名があるだけ。これでは何が何やらまるで分からない。

少年は仕方ねえな、とため息を吐きながら、電話帳を開いて送信者の少女へと電話をかけようとする。が、その直前、逆に電話がかかってきた。しかしそれは送信者の少女ではなく、また別の名前。違う女性だ。何とも騒がしい夜である。

通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。

すると。

『もしもし、遊路（ゆうじ）？』

どこか焦慮の色を帯びた声がすぐさま鼓膜をノックしてきた。

常人ならばそこで不穏なものを感じ取り身構えるなり何なりするだろう。しかしこの少年――久我遊路（くがゆうじ）は、相手を小バカにしている

としか思えない薄笑いを浮かべて。
「おー、どしたよ奏恵(かなえ)ちゃん、こんな時間に。夜のお誘いか？」
『……馬鹿なことを言わないで頂戴。あなたのおふざけに付き合っているヒマはないの』
一蹴。ただの挨拶代わりとしての諧謔(かいぎゃく)だったのだが、まるで相手にしてもらえなかった。
「あらら、珍しく余裕ないのね。何かあった感じ？」
『何かなければあなたに電話なんかしないわよ。――単刀直入に言うわね。また起きたらしいわ、例の事件』
「――へえ？」
空気が一変する。それまでどこかおどけるようだった遊路の声質が、陰惨な零下のそれへと変質していた。
そのことに気づいているのかいないのか、ともあれ電話の主――奏恵は先を続けた。
『襲われたのは学生五人。内三人は逃げ切ることに成功して通報してくれたようだけど、残りの二人は行方も生死も不明。私たちは取り敢えずその二人を探すから、あなたは犯人の方を追って頂戴』
「現場は？」
『三丁目の裏通り。襲われたのはつい三〇分ほど前らしいから、まだそう遠くへは行っていないと思うけど……』
「りょーかい。それで十分だ」
そう言って、通話を切る。
狩人というのは、一度定めた獲物を決して逃がしはしない。が、それでも逃げられてしまった場合は、別の獲物でその穴埋めをする。狩人にとって獲物は獲物であり、それ以外の何物でもないのだから。ああ、つまり種が同じであればそれでいい、ということだ。人間も獲物の個性、特徴など、余程のことでもなければそう気にはすまい。それと同じ。
すなわち、その理屈で言うならば、いまこの瞬間にも街のどこかで誰かが理不尽な絶望を味わっているということになる。それを知

りながら、しかし彼は微塵も同情などせず、義憤もしない。そんなことは己の知ったことではないから。
久我遊路が興味を持つものは、たった一つ。
「今夜の獲物（オモチャ）は、どのくらい遊べんのかねえ……？」
その顔にはもはや鬱屈の色はどこにもなく。
ただ――抑え切れない喜悦の念を表した、引き裂けたような狂笑だけが浮かんでいた。

第一話

人生において、人がもっとも輝きを放つ瞬間とは、やはり死する刹那だろう。

たとえば、重篤（じゅうとく）な病を患い余命いくばくもない人間がここにいたとする。そんな人間が、己が運命に悲憤慷慨（ひふんこうがい）するのではなく、懸命に生きて――そして逝く様は多くの人々に感動を与えるのではあるまいか。否とは言えまい。事実そのような人間を題材とした物語は数多く存在するのだから。

限られた時間を生きるからこそ、その死（おわり）は美麗なものとなる。そしてそれは、物語の中でのみ通用する概念ではない。現実でも、立派に生き諸人を魅了した偉人たちは数多くいよう。人々の生きる指針となった者らは幾多といよう。

であれば、やはり死は美しい。

そう思うのに、この時世、それを見る機会は極端に限られている。特にこの平和ボケした日本という国にいるのなら、なおさら。

ゆえに、彼女――比良坂黄泉（ひらさかよみ）は、いままさに死に呑まれかけんとしている者に手を差し延べはしなかった。

「あ、がっ……た、頼む……助けて、痛いんだよ……っ」

眼下から、呻吟（しんぎん）と懇願が入り混じった声が聞こえてくる。

冷たい地に伏しているのは、二〇歳そこらの青年。一体何があったのか、全身傷だらけで血に塗れている。トラックにでも轢かれたのだろうか。

そんなことを思いながら、黄泉はガードレールに腰かけ先程向かいにある自販機で購入したコーヒーを一口。青年の必死の願いにも、まるで意に介していない。ただその深淵のような無感情の黒瞳（こくどう）で彼を見下ろしている。

「は、あ……誰か、助けて……」
もはや黄泉にどれだけ乞うても無駄と判じたのか、青年は他の者に救済を願い始めた。が、時刻はとうに零時を過ぎている。加え、最近この街――御門（みかど）市では無差別連続殺人という物騒極まりない事件が頻発しているおり、死体が発見されていないだけの行方不明者も大多数出ている。ゆえ、人気が失せたこのような時間に出かける者などほぼ皆無だ。
「ああ……」
と、そこで黄泉は思い至ったように。
「おまえ、例の殺人鬼にやられたのか？　災難だったな」
まさに他人事のように訊ねた。
しかし青年は、弱々しく首を横に振って。
「ば、化物、に……」
とそう返答してきた。
化物。化物？　と黄泉は小首を傾げる。件の殺人鬼は、人間ではないというのか。なるほど、最初の事件から一月経ったいまもまるで警察が成果を挙げられていないのは、そういう理由からだったのか。
「へえ……化物が相手じゃ、警察も大変だな」
どうでもよさそうな口調で呟く黄泉。けれど、彼女とてこの街にいる以上いつ襲われるやも知れない身だ、決して他人事ではない。
が、それでも黄泉は動じない。殺人鬼・化物が潜む街。時刻はそれらが活発になりそうな闇の時間。そしてそれらに襲われたという瀕死の青年が一人。そんな常人ならば恐怖でパニックに陥りそうな状況に立たされているというのに、微塵も心を乱さないのは一体どういうことなのか。
それは言うまでもなく瞭然。
彼女が死を是とし、美と認識しているから。ゆえ、恐怖という感情が無いのだ。
端的に言ってしまえば、人として壊れている。つまり異常者とい

うやつだ。そんな人間に共感を求めても徒労に終わるだけ。
この青年が不運だと言うのなら、化物に遭遇してしまったことより、後に出逢ったのがこの生粋の死神たる彼女だったことがそうだろう。他の誰かならば、助かるかどうかは別としても、救うために動いてくれたろうに。
「あ、は……づっ」
ゴボ、と口から血の泡が零れ出る。もはや彼の死は秒読み態勢に入ったと、医学知識のない素人の黄泉ですら容易に見て取れた。
しかしやはり黄泉は何もしない。ただただ苦しむ青年を観察――観賞するように見ている。もはや彼に救いなどないだろう。もう半刻と持たぬだろうが、その最期の時まで嘆き続けるしかない。ああ、もしも霊というものが世に存在するのだとしたら、こうした者がそうなるのだろう。
だが、運命の悪戯か、あるいは神の慈悲か、奇跡は起こった。
「ん？」
サイレンの音が遠くから聞こえてくる。しかもその音がこちらへ近づいてくる。偶然、ではないだろう。ここには化物に襲われた負傷者がいる。その事件をどうやってか知ったとなれば、警察が黙っているはずがない。
黄泉はぐいっと一気にコーヒーを飲み干し、向かいに設置されている自販機、その隣に置いているゴミ箱へ缶を投げ入れて。
「じゃあ、私は行くよ。達者でな」
腰を上げ、その場から離れる。別段疾しいことなどないのだが、事情聴取だの何だのと警察に拘束されるのは御免だ。面倒臭い。
「あ……ぐ、あ……ま、待っ――――」
去り際、微かに聞こえていた呻き声が唐突に止んだ。
それでも、彼女は振り返らなかった。

瀕死の青年がいた場所から道なりに一〇数分歩いたが、その間誰

一人として見かけることはなかった。街は凍りついたように静まり返り、悄然(しょうぜん)とした空気が満ちている。まさに死の街そのものの様相を呈(てい)していると言えよう。

だというのに、彼女はまるで恐怖していなかった。

腰ほどまである癖のない真っ直ぐな濡れ羽色の髪に、整った柳眉と長い睫毛。刃のように鋭い切れ長の瞳と、綺麗な鼻梁から滑らかに走る小さな口元へのライン、そして雪のように美麗な白皙の肌。ああ、まさに彼女は仙姿玉質(せんしぎょくしつ)――そう呼ぶに相応しい並外れた美女だろう。だが、この不穏に過ぎる闇を逍遥(しょうよう)するその姿が不自然なほど似合う彼女は、外見の美々しさとはかけ離れた彷徨う霊魂のようなおどろおどろしい雰囲気を纏っていた。

だからだろうか。

この黄泉路の如き街路を、平然と彼女が進めるのは。

(……化物、か)

あの青年は言っていた。化物に襲われたと。

普通に考えれば、重傷を負い錯乱していたがゆえの妄言――そう取るのが自然だろう。人は未知なるものを求めながら、自分に害する未知だけは頑なに認めようとしない生き物だから。

それは恐怖から生じた感情。誰もが持つ自衛の願望(こころ)。しかし、前述の通り彼女にはそのような感情(もの)が無い。ゆえに、信じたとまではいかないまでも、頭ごなしに否定してはいなかった。というより、どちらでもいい、どうでもいいと思っている。そんなものになど、比良坂黄泉は微塵の興味もないから。

彼女が関心を持つのは、たった一つだけ。

しかし、その願望は人類という種の大半に受け入れられないもの。ゆえに、彼女は常に無聊していた。特にここ一〇年はそうだ。誰一人として、彼女の存在を認可した者はいなかった。いや、一〇年では済まない。比良坂黄泉という人間が生まれて一八年、その間彼女の存在を認めたのは、たった一人の少年だけだ。

実は彼女、一度この街からちょっとした事情で離郷しており、そ

して帰郷したのがつい一月半ほど前。つまり、ちょうど彼女が戻った直後辺りに、この連続殺人が起こり始めたのだ。不幸と言えば、不幸だろう。彼女は特に何も感じていないが。

ともあれ、事件が起きてなお彼女がこのように出歩いているのは、一〇年前唯一彼女を認め、そしてその在り方に共感し合えた少年を探しているがゆえ。

だが、一〇年振りに帰郷し、いの一番に彼が当時住んでいた自宅へ訪れてみれば、そこには別の家族が住んでいて、当の本人は未だ行方知れず。もしかしたらもうこの街にはいないのかもしれない――というより、家を売り払っていることを考えれば、そうと考えるのが自然だろう。

しかし、それでも彼女は探していた。別に彼に恋慕していたわけではないが、会えるものなら会いたいと思っている。

「……あいつは、どこにいるんだろうな」

そして何をしているのか。

一〇年前の彼ならば、いま街を騒がせている殺人鬼にも恐れず関わろうとするだろう。あの少年はそういう怯懦（きょうだ）とは無縁の、危険嗜好の性質を持っていた。ゆえに、黄泉は敢えて殺人鬼が動きだしそうな夜間の散策を行っているのだが――結果はご覧の通り。さすがに辟易してしまう。

小さくため息を吐くと、不意に視界の端にコンビニが見えた。立ち止まってしばし黙考し、ややあって気分転換に何か適当な飯でも買おうと決を出す。いわゆる一つのヤケ食い、というやつだ。

無人の道路を横断し、コンビニに入る。暗闇に目が慣れていたせいか、店内の照明がいささか眩しく、そして外界の不穏さを笑い飛ばすような軽やかなＢＧＭが耳をくすぐってくる。ああ、ある意味では、ここは年中無休で人々に日常という普遍の安堵を与える憩いの場なのかもしれない。

さて、と黄泉はまず軽く店内を見渡す。特に意味はない。何となくだ。しかし、黄泉はその何気ない仕草から先の行動をしなかった。

否――できなかった。
なぜなら――店内の至る所に飛び散っている鮮血が見えたから。
天井、床、壁――入り口からでも見えるほど広範囲に飛散しているそれは、紛れもなく人の血、それである。仮に凶悪な強盗犯が現れ殺人に踏み込んだのだとしても、こうはなるまい。ゆえにこれは異常。常識（セカイ）から逸した、魔的な光景。
しかし。
「……」
無言。常人ならば悲鳴を上げて然りのはずだが、けれど黄泉は悲鳴どころか表情すら変えることはなく、ただ泰然と佇立していた。
ほどなくして、ゆっくりと黄泉が動き出す。急くでもなく、躊躇するでもない、自然な足取りで奥へと進んでいく。
すると、何かを噛み砕くような、そんな音が聞こえてきた。いや、砕く音だけではない。何かを引きちぎるような音もまた。
まともな神経の持ち主ならば、ここで引き返すことを選択しただろう。あるいは警察に通報するか、もしくは真相を確かめんと恐怖に耐えて進むか、そのいずれかだ。それで言うなら、黄泉が選んだ選択肢は三つ目ということになる。だがしかし、どういうわけか、歩を進める度に無であった彼女の表情が、恐怖ではなくどこか笑みの形に歪んできているような……
そして。
彼女は、『それ』と遭遇する――
「……、ア？」
血だまり。その中で、血塗れの肉塊を抱きしめるようにして貪る、人間――のような姿（カタチ）をしたモノがそこにいた。
「ナンダァ、オマエ？　ダレダァ、テメエ？　ナニシニキヤガッタ？」
爬虫類のような無機質な金色の瞳が黄泉を捉える。口元は血でベットリと濡れ、爪牙は人間のものとは思えない、さながら獰猛な肉食獣の如く鋭利。そしてその肉体はまさに筋骨隆々で、その体表は

毒々しい黒々としたもの。そのような異形の『それ』が喰らっているのは、原型こそ留めていないものの、けれど間違いなく人間であった。

さて、これらを踏まえて、果たして『それ』を人間であると思える者はいるだろうか。いやいまい。いるはずがない。如何な痴愚であろうと見紛わないだろう。黄泉もそうだった。これは人ではない――化物、怪物、妖魔の類であると。

「ソウカ……オレヲコロシニキタンダナ……アノカタノチョウアイヲウケテイルオレヲネタンデッ！！」

妖魔が吠える。その瞳に宿るは激甚な憎悪。いや――あるいは恐怖か。凄まじい被害妄想に捕らわれている魔性の怪物は、ゆえに視界に入った人間をそこの肉塊のように殺してきたのだろう。ああ、もしかしたら先程出会った青年、あれもこの妖魔にやられたのかもしれない。そして今度は己の番。

しかし、それを理解した上で黄泉が見せた反応は……

「へえ……滓徒か。ほとんど壊れてはいるけど、最低限機能はしてる……なるほど、件の殺人鬼の正体は、凄腕の魔術師ってわけだ」

まるでちょっとした謎を解き明かした子供のような、そんなしたり顔を浮かべていた。

それに、妖魔は。

「コロス……コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス――オレヲコロソウトスルヤツハ、ドイツモコイツモブチコロシテヤル――――ッ！！」

響き渡る絶叫にも似た咆哮、その凶念の波動が残らず店のガラスを砕き陳列棚を薙ぎ倒した。が、しかし黄泉は仰け反らない。如何な暴風にも揺るがぬ不動の巨木の如く、彼女は微塵も気圧されていなかった。

その顔に浮かぶは喜悦の笑み。どこまでも淫靡でおぞましい、魔性の微笑。

仮にこの場に第三者がいたとするならば、果たして一体どちらを

化物と呼んだであろうか。
――妖魔が雄叫びを撒き散らして突貫してくる。
それはさながら巨大岩石の驀進（ばくしん）。ゆえに、人間の柔な体であれを食らえばひとたまりもない。ただ惨たらしい轢殺（れきさつ）死体と化すのみ。
だが黄泉は逃げず動かず、ただ自然体のまま――
「――無間乖離（むげんかいり）」
死（おわり）の言霊を紡いだ。

第二話

魔術師とは、狂おしく求めてやまない己が願い、祈りを顕す魔術なる術を会得した者らの総称。ああ、それは信仰によって奇跡を為す祈祷師（きとうし）と酷似した能力と言えるだろう。だが唯一にして決定的に異なる点は、彼らが神や精霊などという絶対の上位者を信奉するのではなく、ただ己の至上性のみを信ずる狂信者であることだ。

世界（かみ）が敷いた法など知らぬ。この己れが定めた法理こそ至高――それが彼らの共通認識。ゆえに、魔の術を揮う者と彼らは呼ばれている。

そして、その異端者がここに一人――

「……」

比良坂黄泉（ひらさかよみ）は無言で『それ』を見下ろしていた。

そこに先程までの喜悦の色はない。まるで興味のない玩具を見つめる子供のような、そんな無感情の瞳。その視線の先には――血の海に沈む、黒い肉片。

塊と呼べるものなど一つとしてない。文字通り微塵となったそれは、けれど間違いなく数瞬前まで猛り狂っていた妖魔だ。

それがいま、刻まれ血に沈んでいる。そしてそれを為したであろう張本人たる彼女は、しかし先の位置から一歩も移動しておらず、且つ指一本動かしていない。

ただ死ねと。そう彼女は念じただけ。それだけで、人外の怪物はこのような無惨な肉片となり果てたのだ。　ならば彼女は化物――それでは足らぬだろう。死神。まさにそう呼ぶに相応しい存在である。

と、妖魔――その残骸が、突如蒸発するように消滅していく。が、黄泉はもはやどうでもいいとばかりにそちらを見向きもせず。

「どうするか……店員いないし、勝手に持ってくのもまずいだろうしな」
などと、妖魔の異変より買い物の成否の方に意識を向けていた。彼女の中では、あれらのような怪奇存在よりも買い物ができないことの方が遥かに衝撃（インパクト）のある事柄だったようだ。
どうするか、と黄泉はしばらく店内を歩き回って黙考し、やがて諦めたように外へ出た。別に持って行っても構わなかった――彼女の中では――のだが、そもそも気分転換が目的であったゆえ、盗人の真似事までして欲しくはなかったのだ。そんなことをしたら、後々忸怩（じぐじ）の念に苛まれることは明瞭だったから。
さて。時刻はすでに深夜二時を過ぎている。如何に異常者たる黄泉と言えど、睡魔というものはむろんあり、いつまでも抗えるものでもない。ゆえに今夜はこのくらいにして、そろそろ帰るべきか。
そんなことを考え始めていると。

「――へえ。あの下賤（げせん）な狗共の他に、まだこの街に魔術師がいるなんてね。一体何者よ、あんた？」

鈴のような、それでいて力強い凛とした声が何処からか飛んできた。
黄泉が声のした方へ視線を放ると、道路脇の一本の電柱、その上に少女が優雅に座しこちらを見下ろしていた。
左右に結われた赤い髪と、華奢な身体を包む漆黒のドレス。年の程は一四、五と言ったところで、まだ幼さが抜け切っていないその愛らしくも端麗な面相は、けれど零下の笑みによって怖気の走る凶顔（きょうがん）と化していた。余程の愚物でもない限り、この少女が見た目通りの娘だとは思わないだろう。
「よ」
そんな気の抜けた声を発し、不意に少女が電柱から飛び降りる。優に一〇メートルを越える高さからの降下にもまるで恐怖を感じて

おらず、落下の衝撃すら意に介していない。まさに舞い降りるかの如く華麗に着地を済ませた。
そして、その宝石のように美しい紺青の瞳をこちらに向けて。
「ねえ、何者なのよって訊いてるんだけど、どうして答えないの？　あのクズ共の仲間だから？　警戒しているから？　それとも――無視してるの？」
少女の眦（まなじり）がわずかに引き絞られる。それだけで、気温が一気に下がったような錯覚に見舞われた。
「……」
だが、黄泉の表情に変化はない。明らかに尋常ではないと分かる存在と相対しているにも拘わらず、その心はなおも不動。その理由は一つ。
目前の少女が何者なのか、すでに彼女は看破していたから。
しかし、それは別段黄泉の洞察が優れているというわけではない。魔の道を行く者ならば皆等しく気づいたであろう。
――この少女が、魔術師だということに。
だが、それを察しながらも、黄泉は微塵も臆することなく。
「別に。ただの通りすがりだよ。で――いいか？　もう行っても」
「……やっぱ舐めてるわよね、あんた」
少女の表情にわずかに険の感情（いろ）が浮き出る。それはすなわち、お前を殺すという絶対の殺意の表れ。
少女が魔術師であると黄泉が見抜いたように、この少女もまた、比良坂黄泉が魔術師だと看破している。ゆえ、本来ならば彼女たちが互いが互いをそうと判じた瞬間に争いが起こっても何ら不思議ではない。異なる飢えた肉食獣を一つの檻に入れたらどうなるか――問うまでもなくそれは瞭然だろう。これは、そういう話。
そして、黄泉はその危ういながらも成り立っていた均衡を、たったの一声で崩してしまったのだ。
ならば、これから先起こることは全て既定と言えよう。
「その余裕面がどこまでもつか、見せてもらおうじゃない」

少女が手を虚空に掲げる。するとその直後、掌で爆ぜるような閃光が迸り（ほとばし）――刹那の間に一振りの長剣が現出した。
三日月のように湾曲（わんきょく）した刀身で、全長は七、八〇センチ程度の片刃剣。重量は定かではないが、けれどこのような戦の凶器、少女の細腕では自在に振るえないことは自明だろう。
だがしかし、少女は苦もなく軽々と片手一本でそれを肩に担ぎ。
「はぁっ！」
明瞭と言うのもおこがましいほどの間合いの外からそれを振るった。
むろんそんなものが届く道理などない。ゆえに、その剣戟はただ弧を描くのみに終わった――と黄泉が判じた、その瞬間。
あり得ない軌道、あり得ない伸長でもって剣戟が彼我の距離を潰し襲いかかってきた。
「――――、っ」
瞬時に身を翻す。その超反応は人間離れしていたが、しかし完全には避け切れず、黄泉の頬に一本の赤い線が刻まれた。
それは文字通りかすり傷。けれど、人外の化物ですら触れることも能わなかった比良坂黄泉に、不意打ちとは言え傷を付けたこの少女は、間違いなく先の妖魔より格上の存在と言えるだろう。
「……蛇腹剣（じゃばらけん）、か。また珍妙な代物を取り出したもんだ」
手の甲でぞんざいに血を拭いながら、何事もなかったかのように黄泉は先程の不可解な現象を起こした少女の剣、その正体（な）を口にした。
「あんたも、よく躱せたじゃない。大抵の奴なら今ので終わってたのに」
言って、少女がゆっくりと剣――蛇腹剣と呼ばれたそれを振り上げる。すると、所有者たる少女の意志に応じるかのように、途端にその形状が変化した。
それはまさに蛇腹の如く。無数に分割された刃が、ワイヤーによって連結され鞭と化している。なるほど、確かにこれならば間合い

は一気に拡大し、且つ不意も突ける。剣と鞭の二重属性を有する近中間距離に適したそれは、扱いこそ難しいが、けれど使いこなすことさえできれば強力な武器となるのは間違いないだろう。
しかし、蛇腹剣なるものは克服し難い欠陥を持っているため、実際に作ることは不可能であり、想像上の武具とされている。ならば、これは――
「……幻装具（げんそうぐ）。願望の具現因子、か」
黄泉が呟く。
幻装具――それは己が祈りを具象させる魔術とは異なり、自身の願いを叶えるための要素（ファクター）、魔術を発動するための儀式道具である。
ゆえに常識などまるで通用しない。これは幻想という超常の域にある秘具（アイテム）なのだから。
「――さて。まさかとは思うんだけど、たった一太刀避けた程度で勝てる――とか思ってたりしないわよね？」
すでに勝利を確信しているかのように、上位者の言を投げる少女。
対する黄泉は、悲嘆するでも憤激するでもなく、ただため息を吐いて。
「おまえ、少し黙った方がいいぞ」
「――――――」
少女の顔が笑みのまま凍りついたように硬直する。予想だにしない返答に、脳が思考を止めたのだ。が、黄泉はそんなことに気など払わずさらに続ける。
「自分を大物に見せたいんだろうけど、こんなかすり傷一つ付けただけでそんな得意げな顔したら、全部台無しだ。ただでさえそんな姿（なり）してるんだから、無駄口叩くと余計小物に見える」
「な、にを……」
言っているんだ、と少女が掠れる声で訊ねる。
お前はいま命を狙われているのだぞと。殺されかかっているのだぞと。
なのにどうして――そんな物知らずな子供を諭しているようなの

だと。
少女は、そう問うた。
それに、黄泉は平然と。
「子供が好きなんだよ、私は。年不相応に背伸びしてる子供は、特にさ」
「っ――――！」
少女の顔が憤怒へと瞬転(しゅんてん)する。
雑魚と思っていた相手に敵とすら認識されていなかったその屈辱に耐えられるほど、少女の精神(こころ)は寛容ではなかった。
「舐めてんじゃ――ないわよォッ！！」
叩きつけるように、少女が蛇腹剣を揮う。
刃が分割され、剣が鞭へと変質し蛇のような――否、荒れ狂う龍の如く不規則な軌道で黄泉を殺さんと迫る。
だが、対する黄泉はあくまで泰然。死の恐怖など微塵も感じていないかのような落ち着きぶりだ。何か手があるのか、はたまた死を恐れていないだけか。
その答えが出る、刹那の直前――

――銃声が、轟いた。

「なっ――――」
少女が驚愕に目を剥く。その理由は明快。
黄泉の首を喰い千切らんとしていた龍の剣(あぎと)が、甲高い音を発し何かに弾かれたからだ。その？何か？の正体、言うまでもないだろう。銃弾である。
つまり、己は邪魔をされた――
「っ……、だれ！？」
そうと判じた少女が、三白眼の形相で吠える。
向けられた視線は、路地裏へと続くビルとビルの間の裏道付近へ。
その凶眼(きょうがん)の先に――彼はいた。

「お〜、おっかねぇ。そう怒鳴んなよ、アイサツみてえなモンだろうが。器が知れるぜ？　お嬢ちゃん」

場の空気を度外視した緊張感のない、それでいて相手を小バカにするような声が響く。それに反応を示したのは、やはり虚仮にされた少女だった。

「……そんな所に隠れてないで、こっちに来なさいよ。それとも……姿を晒すのが怖いのかしら？」

「ハッ。余裕ねえなァ、ほんと」

くっくっと可笑しそうにせせら笑いながら、ゆっくりと声の主がこちらへ近づいてくる。けれどそれは少女の挑発に乗せられたからではない。最初から隠れているつもりなどさらさらなかったから。でなければ、己の存在を示すような愚行を誰が犯すだろうか。

電灯の陰から照らされた戦場（こちら）へ。闇の帳（とばり）を剥いで露わとなった声の主の正体は、黄泉と変わらない年頃の、けれどなぜか白く塗れた髪をした少年だった。

彼を視認すると、少女はより一層その顔を強張らせて。

「やっぱり現れたわね。薄汚い狗が」

「あ――？　狗はテメェだろ？　ご主人様に調教されて、何でも言うこと聞いちまう雌犬なんだから」

「こ、のっ……！」

「ン？　何だ、鶏冠（とさか）にきたか？　ハハッ、沸点低いねえ。やっぱお子様だ、もう癇癪（かんしゃく）起こしちまったよ」

露骨に過ぎる煽動の言を吐く少年。それにまんまと釣られ、少女の瞳が赫怒に燃える。もはやその怒りを抑えることは不可能だろう。少なくとも、二桁以上の命を嬲（なぶ）らねば。

しかし少女はそんなしち面倒な真似はせず、もっとも単純且つ明快な方法を選んだ。

「……いいわ。いいわよ、上等よ。あんたたちここでまとめて殺し

てあげる！」
少女が蛇腹剣を手に食い込ませんばかりに強く握り締めて咆哮する。掌からは血が滲み滴っているが、けれど少女は微塵も意に介していない。いまの彼女には、痛みなど些事以外の何物でもないのだろう。
だが、それほどの憤激を呼び起こした彼はというと。
「あーらら。オレら殺すってさ、どうするよ？」
いつの間に黄泉の傍へ忍び寄っていたのか、嬉々とした楽しそうな口調でのんきに訊ねた。
「さあな。取り敢えず一発殴られてきたらどうだ？　怒らせたの、おまえだろ」
「あぁ？　なーに責任全部オレに押し付けてんのよ？　オレが来る前から十分キレてたろ、あの嬢ちゃん」
「私は何もしてないよ」
「うっは、無自覚かよ。タチ悪りぃ～」
肩を竦めて野次る少年。なるほど、確かに無自覚の悪意こそが何よりも迷惑だと言うが、さりとて自覚ありの悪意もまた同様に害だ。ああ、つまりはこの二人、五十歩百歩である。
それが証拠に、
「何遊んでるのよ、ゴミ共がァッ！！」
少女の怒気は一向に鎮静されていない。むしろ悪化しているようにさえ思える。
だというのに。
「はいはい、りょーかい分かりましたよー。相手してやるから、ンーながなんなって」
少年はなおも挑発の言を飛ばし、黄泉はもはや興味が失せたのか、星空などを眺めていた。もはや双方共に少女など歯牙にもかけていない。
それに。
「――殺す」

殺意に満ちた絶対零度の声で静かに少女は惨殺を誓う。
「真正（アルカナ）――」
少女が瞑想に入る。己れという存在の根幹、魂――その希求。祈り渇望する自身の願（うた）いを紡ぎ、それを具現せしめる――瞬間。
「――――――あ」
突如電源を落とされたかのように、何の前触れもなく少女は止まってしまった。
「……、」
先程までの憎悪が嘘だったかのように少女は沈黙する。凝然と見開かれる瞳には怒りではなく怪訝の色が浮かんでおり、戸惑いの感情がありありと浮き出ている。いまこの時において、少女の目は黄泉や少年を映していない。虚空をただ眺めている。――否、そこに在る何かを見つめている。一体彼女の視界（セカイ）が捉えているものは何なのか。
「な、んで……」
やがて、少女がか細い掠れるような声で呟いた。が、その直後。
「どうして――なぜ退けとおっしゃるのですか！？　ここでこいつらを見逃す手はありません！　必ずや私が討ちますから、だから――」
信じてくれと、任せてくれと、そう少女は居もしない誰かに悲鳴染みた声を上げて懇願した。だが、数瞬の間を置いて少女は茫然と自失したように静止し、ややあって憤懣（ふんまん）の意を示すように己が剣を地面に叩きつける。それが、少女が受け取った返答を言葉以上に如実に表していた。
「……っ、……！」
少女は怒りのあまり総身を震わせ、一〇代半ばの小娘とは思えない恐ろしい悪相で黄泉と少年を睨みつけ。
「あんたたちは私が必ず殺すわ――覚えてなさい」
そう言い残し、少女は常人ではあり得ない跳躍で電柱に飛び乗り、そのまま飛翔するように闇の腸へと溶けて行った。

第三話

「あーらら、逃げられちまった。せっかく今夜は遊べると思ってたのによ」

少女が去って行った方角を見つめて、少年が惜しいとばかりに愚痴を零す。あのまま少女が撤退しなければ間違いなく凄惨な殺し合いが行われていただろうに、彼はそれを遊興と断じた。強がりなどではない。言葉にせずとも、余程の愚鈍者でなければ察せられるだろう。彼の纏う軽薄な空気の内に秘めた、煮え滾る狂気の熱が。

しかし。

「わざと逃がしたくせに、よく言うよ」

「あら、気づいた？」

悪戯がバレた子供のような顔で、少年が肩を竦める。

それに黄泉は、当然だと言わんばかりに首肯し。

「大方、あの女を餌にご主人様とやらを釣ろうって魂胆なんだろ？バカでもわかるよ、そんなこと」

あの明け透けな煽りを見て気づかない者がいるとしたら、そいつは白痴以外の何物でもない。そして黄泉はそうではなく怜悧（れいり）。ゆえに、彼女は少年が出てくる前から勘付いていた。

あの少女が妖魔を使役し、殺人鬼と呼ばれ街を騒がせている張本人なのではなく、彼女もまた、魔術師に使役されている使い魔の如き存在なのだと。

「へえ……鋭いね。美人で聡明。いや、てっきり今夜は撒き餌だけで終わっちまうかなーなんて思ってたけど、こりゃいい拾（であい）いモンしたぜ」

ケタケタと屈託なく笑う少年。それに、黄泉は何やら言い知れぬ不快な気分に見舞われたが、まあいい。先の決定通り、今夜はもう帰るとする。

「それじゃ。私はもう行くぞ」

「っておいおい、ちょっと待とうぜ美人さん。この状況で『はいさよなら』はねえだろッ」
踵を返して去ろうとすると、焦慮の声を上げて少年が肩を掴んできた。それに黄泉は反射的に振り返り、結果、両者は向かい合う態となる。
外見の若さからは考えられない白髪頭に、チンピラみたいな出で立ち。顔はそれなりに整ってはいるが、性格の悪さが隠せていないので三割減――と、そう分析しながら彼の面相を凝然と見つめる黄泉。別に男の顔に興味など彼女はないのだが、けれどこの男のそれだけは妙に気になった。
一目惚れ――などという怪奇現象ではないだろう。経験がないゆえ断言はできないが、兎にも角にもそうと黄泉は決を下した。ではこの胸中に渦巻く筆舌に尽くし難い感情は何なのか。
黄泉はしばらく思考に耽り、ややあって。

『――おまえ、名は？』

同じタイミング、同じ言葉でもって、二人は互いにそう問い合っていた。
「……」
「……」
沈黙。
双方共に訝しみ合いながら、互いの顔を見て首を傾げている。目睫の彼・彼女を、どこかで見たことがあるとばかりに。
そしてやがて、この膠着状態に嫌気が刺したのか、少年がおもむろに名乗りを上げた。
「久我遊路（くがゆうじ）。見ての通りのイケメンだ。惚れていいぞ」
自己紹介、というにはあまりにも間抜けに過ぎるその物言い。普段の彼女ならば視界に入れる価値のない愚物と断じて速やかにその場から離れていただろう。だがいまは、離れるどころかその場に縫

い止められているかのように固まってしまっていた。
元々彼女は感情の起伏が極端に乏しい。ゆえに人外の化物と遭遇しようが蛇腹剣を揮う魔術師の少女と出くわそうが、毛ほどもその心を乱さなかった。
だというのに、その彼女がいまはわずかながらに動揺していた。目は泳ぎ、体もどこかそわそわとして落ち着かない。むろん他人が見れば相も変わらない無愛想な少女としか映らないだろうが、しかし。
「その反応……お前やっぱ黄泉だろ？　比良坂黄泉」
少年――遊路は、いとも容易くその微小な揺らぎを見抜いていた。
それに、黄泉は。
「ああ……まあ、そうだけど」
常に毅然としていた彼女らしからぬ曖昧な返答をするだけだった。
事実、黄泉はどうすればいいのかまるで分からなかった。
いま彼女の目前にいる彼、久我遊路こそが、この一ヶ月黄泉が探し続けていた幼馴染に他ならない。ゆえに、こうして再会できたことは嬉しく思うし、幸運だとも思っている。
だが、あまりに虚を突かれてしまったのと、そして何より幼馴染と一〇年振りに顔を合わせた時に見せる反応というものが、彼女は分からなかったのだ。――というよりは、知らなかったと言った方が正しいか。
昔から遊路以外に友と呼べる者などいなかった黄泉は、であるからこそこのような状況に不慣れで対応できなかった。
そんな彼女とは対照に、遊路は呵々と笑いながら。
「ハハッ、何だよお前、帰ってきてたの？　こうしてツラ合わせんの何年振りだっけ？」
「……一〇年」
そう。一〇年だ。それは途方もなく長い年月だった。永遠と言えるほどに。
けれどその一〇年（えいえん）は、彼女の生涯においては空白の部分。何の価

値もない無意味な時の流れでしかなかった。ゆえに苦痛。ただ在るというだけの空っぽの生は、まさに無間の地獄、その呵責（かしゃく）に相当した。

しかし、その地獄もここで終わる。

「一〇年だよ、遊路」

彼の両の瞳を見つめながら繰り返し言って、手を伸ばす。さながら愛しい男を求める少女のように。

「……、」

遊路も、彼女の心情を察したのか、彼にしては珍しく神妙にしている。黄泉ほどではないとしても、この彼もまた比良坂黄泉という少女を求めていたのだろう。

――黄泉の白皙（はくせき）の繊手が遊路の頬にそっと触れられる。

一〇年振りに感じる彼の温もり。欲していた唯一のもの。

それを愛撫するかのように黄泉はゆっくりとその手を輪郭に沿って上げていき、そして。

「――何で髪白いんだ？」

彼の異質に過ぎる白髪を一束掴み、場の雰囲気を破壊する質問を投げかけた。

「……ああ、安心したぜ。お前が昔と変わらない天然魔性女でよ」

するとどういうわけか、遊路が口の端を無理矢理広げて強引な笑みを作って、皮肉を飛ばしてきた。

何か癇に障るようなことでも言ったか？　と黄泉は眉根を寄せて首を傾げたが、遊路は「何でもねえよ」、と呆れたような、疲れたような、気抜けしたような面持ちで捨て吐き。

「まあ、積もる話は場所移してからにしようや。こんな所で立ち話もあれだしよ」

「別にいいけど、どこ行くんだ？」

「オレん家――みてえな所」
何だそれ？　と、そう黄泉が問うた瞬間。
「……ん？」
突如タイミングを見計らったかのように、エンジンを唸らせ猛スピードで街路の角から数台の車が曲がってきた。
複数の車は黄泉らを取り囲むように停車し、さながら犯罪者にそうするかのように四方からライトを当て、二人の姿を闇から浮き彫りにさせている。そして車越しからでも伝わってくる明確な威嚇の意。わずかでも妙な挙動を取れば、この連中は躊躇いもなく己を殺そうとするだろう――そう黄泉は判じた。
と――一台の車からおもむろに人が出てくる。
スーツに身を包んだ二〇代半ばの女性。後ろで結んだ樺色（かばいろ）に染められた美麗な髪と、グラビアアイドル並みに起伏の激しいスタイル、そして怜悧にして端麗な顔立ち。まさに美女――そう呼ぶに相応しい女性だ。が、むろんそんなことはいまこの場においては些事でしかない。
肝要なのは、この者らが一体何者であるかということと、そして何が目的なのかということ――ではなく。単純に、向かってくるのか来ないのかというだけ。
もし前者であるのなら、その時は――ここにいくらかの肉片が散乱することになる。まあもっとも、この者らはそのような未来など毛ほども想定してはいないだろうが。
と、女性が不意に口を開く。
「状況が呑み込めないんだけど、その子は何？　被害者？　それともまさか、その彼女も？奴？の滓徒（しと）、あるいは真徒（しんと）なのかしら？」
「いや、違ぇよ。こいつはいまし方感動的な再会を果たしたオレの嫁、比良坂黄泉だ」
一体いつの間に己れが彼の伴侶になっていたのかは甚だ疑問だが、ひとまずそれについては置いておくとして、どうやら遊路とあの女性は顔馴染みであるらしい。ならば無害だ。手を下す必要はないだ

ろう――そう考える黄泉だが、しかし一方の女性はというと、どういうわけか目を見開き、絶句していた。
その理由、黄泉の知るところではないが、けれど遊路は分かっているのか、悪戯小僧染みた笑みを浮かべて。
「こいつ引き入れようと思うんだよ、オレらンところにさ。かなーり有用だと思うんだけど、どうよ？　奏恵（かなえ）ちゃん」
「……私が応と言うとでも？」
「思うね。じゃなきゃ提案しねえさ。だーじょぶだって、オレがしっかり調教すっから。ご主人様ーとか言わせてやっから」
なァ？　と同意を求めてくる遊路。彼の思考に限っては黄泉ですらまるで読めた試しがない。というより、知りたくもなかった。どうせ下劣で間抜けなことを考えているだろうから。
ゆえに、黄泉はどうでもいいとばかりに。
「好きにしろよ」
「ＯＫ。ンじゃさっそく――」
と、そう言った直後だった。
金属音を鳴らした硬い何かが、黄泉の両手首に巻き付いたのは。
「……遊路？」
それを見て、黄泉が怪訝そうにわずかに眉を潜める。だが、これは彼女だからこの程度の反応で済んでいる。まともな者ならば激甚な吃驚（きっきょう）か、あるいは理解ができず茫然とするかのどちらかだろう。
なぜなら、いま黄泉の手に掛けられたものは――紛うことなき手錠なのだから。
どういうことなのかと問う黄泉の瞳に、遊路は。
「逮捕だ」
そう、意地の悪い笑みを浮かべて嘯いた。

第四話

そこは――地獄だった。

凄絶な呵責に喘ぐ男の、女の、老人の、幼子の声が幽暗（ゆうあん）の闇に間断なく木霊（こだま）する。それはまさに怨嗟（えんさ）と嘆きに満ちた死の旋律（メロディ）。それを、『彼』はお気に入りの楽曲でも聴いているかのように心地良さそうに悦楽の笑みを浮かべていた。

一筋の光も届かぬ無明の深淵。まさに伏魔殿（ふくまでん）と呼ぶべきその暗黒の中に住まう『彼』が座するは、人の肉と骨とで構築された死の玉座である。常人ならばそれに触れただけで滲み出る憤怒と慟哭の念に意識を塗り潰されるが、しかし『彼』にとっては己を飾る装飾品に過ぎなかった。

金糸のように輝く鮮やかな長髪。見る者を虜にする艶やかな碧色の双眸は、けれどどこか言い知れぬ狂気を秘めており、隙無く造り込まれた完璧なる容姿の造形が『彼』の不気味さにさらに拍車をかけている。

そんな『彼』の眼下では、いままさに人間から妖魔への変生（へんじょう）が行われていた。

髪が一本残らず抜け落ち、肌は爛れ、各器官は膨張と収縮を繰り返す。その痛みたるや筆舌に尽くし難く、まともな人間ならば数分と経たず壊れてしまうだろう。

事実、ここに自己を保っている人間は一人として存在しない。元は人として生きていた者らは、けれど『彼』の邪法に染められ全く別の存在（モノ）へと変わり果てていた。

これこそが魔術師としての『彼』――イモータルの使い魔創生術である。

行方不明として取り上げられている者らは皆ここへ連れて来られ、このような悪辣にして陰惨な実験体として扱われていたのだ。

肉体強度を極限まで高めていき、その過程で生じる激甚な痛みでもって精神を擦り潰し、己が魔術を深層意識の底まで浸透させる。それはもはや悪魔の所業。人の尊厳を剥奪する外道の為せる業であった。

「甘美だ。だが足りん。もっと哭けよ貴様ら、所詮それしかできん屑であろうがよ」

ガクガクと体を痙攣させる男を蹴飛ばし、嗚咽を洩らす女を踏みつける。彼には他者に対する情など微塵もない。己以外の生物は全て卑賤なる屑と認識している。ゆえ、老若男女の区別なく、平等に己が悦のためにその命を奪い消費させるのだ。

まさに悪魔のような――その表現が正しく符合する存在が彼であった。

イモータルはいまし方変生した妖魔をざっと見渡し、

「ふむ……此度生まれたのは滓徒のみか。他は全て失敗――使えんな、実に」

呆れ果てたように切り捨てた。

何の価値もない無為な生を送り、ただ死んでいく人間共。だが彼らは己が生に何かしらの意味を求めている。ゆえにイモータルはその意味をくれてやった。世界に愛された至高の存在である自分――その無聊を紛らわせる玩具としての意味を。

だというのに、その玩具にすらなれぬ塵が存在した。存在し、その者らを視界に収めてしまった。実に不快であること甚だしい。

「塵が。ならば最初から喋るな、動くな、疾く失せろ」

すると、その言葉を合図としたかのように、地から無数の妖魔が這い出し、一斉に彼の玩具となり切れなかった塵へ襲いかかった。

「――――――――」

絶叫が迸る。剥き出しとなった神経のまま、彼らは爪と牙を突き立てられているのだ。その痛みたるや人の許容を遥かに超えている。耐えられるはずもない。

やがて悲鳴が小さく、掠れるようにして消えていく。だがイモー

タルの意識はもはやそちらには向いていなかった。捨て終えた塵に関心を持つ者などいないだろう。それと同じ。
と。

「ただいま戻りました、ご主人様」

不意に、この狂気に塗れた空間にはそぐわない少女の声が響いた。
やおらイモータルがそちらに視線を放ると、そこには黒いドレスを着た少女が片膝をついて恭しく跪(ひざまず)いていた。
それを視認したイモータルは、その尊大に過ぎる瞳をほんのわずかに緩ませて。
「ああ。よく戻った、我が片腕エリザベスよ。見るに、ずいぶんと羽目を外していたようだが？」
「……申し訳ありません。あのような下賤な輩の煽動に心を乱すなんて、ご主人様の忠臣として恥ずべき醜態。このエリザベス、如何な罰をも甘んじて受ける所存です」
頭を垂れ、己が失態を素直に認める少女――エリザベス。彼女にとってはこの目の前にいる彼こそが絶対の主であり信奉する神なのだ。ゆえに、その意にそぐわぬ愚行を見せてしまったというのなら、相応の罰を受けるが必然。少なくとも、エリザベスはそう考えていた。
だが。
「良い。頭を上げよ、エリザベス。お前に落ち度などありはせんだろうが」
「え……ですが、私は――」
無様な姿を晒してしまったではありませんか、と。エリザベスは自身の罪状を告白した。
イモータルという男は極大の自尊者だ。ゆえに、如何に己ではないとしても、その臣下が愚昧な輩に軽視されたとすれば、それら共々を即座に断罪するだろう。事実これまではそうだった。

だというのに、それがいまは罰を下すどころか罪すらないと、そう言うのだ。
これは一体如何な心境の変化か。
そのエリザベスの疑念に、イモータルはどうともなく答えた。
「あのような屑に侮辱されたのならば、憤激するは道理であろう。よって貴様は正しい。間違っておらんよ」
「でしたら、なぜあの時お止めになったのですか？　奴らは揃って魔術師です、今後も私たちの邪魔をしてくるでしょう。醜い虫は疾く灰燼(かいじん)に帰せ――ご主人様もそう仰っていたではありませんかっ」
なのにどうして、とエリザベスは再度問う。己の判断が間違いでないというのなら、なぜ奴らを殺すのを止め撤退させたのだと。
そんなエリザベスの詰問に、
「ここしばらく同じことの繰り返しでな、少々鬱屈していたのだ。見てみよ、この醜穢(しゅうわい)な塵共を。なぜ、こやつらはお前のようにいかんのかな。甚だ謎だ――そう思ってしばらく実験を続けていたのだが、それもいささか食傷気味でな。飽いてしまった。ならばこの無聊、どう慰めれば良い？」
「……玩具、ですか？」
「ああ。たまには児戯も良かろう？　特に、己れが至上であると思い込んでいる身の程知らずの屑共の相手とならば、な」
くつくつと喉を鳴らし、陰惨な笑みを浮かべるイモータル。彼は他の誰をも認めていない。己れに比するは世界(かみ)のみ。それ以外の遍(あまね)く全ては取るに足らぬ屑である。
それが魔術師・イモータルの価値観。
傲慢に過ぎるその思想、けれど虚仮ではない。彼はその尊大な性根に見合うだけの実力を有している。でなければ、そもそもエリザベスがここまで唯々諾々と従うはずもないだろう。
「そうだな……あの女はお前にくれてやろう。如何に児戯とは言え、脆弱な女風情を相手取るのは我の沽券(こけん)に関わる。せいぜい遊ぶが良い、エリザベス」

「仰せのままに」
恭謹（きょうきん）に応諾するエリザベス。
女は脆弱――そう揶揄（やゆ）されても彼女は顔色一つ変えることはなかった。むろん他の第三者が同じことを口にすれば、身をもってその発言が如何に愚かだったかを教えていただろうが、しかし主がそうと断ずるのなら話は別だ。それが正論であり世の真理。ゆえに反駁（はんばく）などあり得ない。
と、不意に。
「では、まずは狐狩りといこうか」
そう言って、イモータルは指をパチンと鳴らした。
するとそれが合図だったのか、闇の空が突如二つに割れ、そのまま暗黒の世界は捲（めく）られるようにして一瞬の内に何の変哲もないビルの屋上風景へと転変した。
そう。つい先程まで彼がいた場所は、イモータル自身が魔術によって編んだ結界の中だったのだ。ゆえにこれまで何者にも見つけられることがなかった。何せ位相のズレた空間は、もはや？異界？と何ら変わらないものなのだから。
おもむろにイモータルはいまし方生誕したばかりの妖魔に視線を投げ、
「さあ、行くがいい塵共。我が玩具を見つけてこい」
そう号令を下すと、即座に妖魔たちは主の命に従い四方八方へ飛び去って行く。

それは星のない暗天の夜の出来事。
その無明の闇を切り裂くように、蹂躙するように、数多の悪鬼羅刹は百鬼夜行の如く進軍し、これより始まる恐怖劇（グランギニョル）の幕開けを告げていた……

第一話

そこは御門市の街外れに鎮座するとある屋敷。
広大な敷地に見合う豪壮な造りをしたその邸宅は、この街一番の豪邸だ。ゆえに諸人から羨望を、あるいは妬みの念を常に浴び続けている。ならばその中から強盗を目論む不届き者が出てきてしまうのはまたやむなしと言えるだろう。
だが、超常の力を有する魔術師の観点からすれば、それはまさに愚の骨頂。暴挙とさえ言える自殺行為に等しかった。
理由は瞭然。
その屋敷もまた、尋常の埒外にある魔城であったから。
幾重にも編み込まれた堅牢なる重層結界、四方八方に施された侵入者を排する迎撃術式、そして百メートル圏内に入った魔術師を瞬時に捉える索敵機能――等々、無数の魔術防備が敷かれた、まさに要塞とも言える鉄壁の屋敷だ。それらを踏まえて、わざわざここへ金銭如きを奪いにくる者など、まずいまい。
さらに、それに加えてこの堅固な護りは外敵にのみ有用なのではなく、内にいる者に対しても存分に効力を発揮する。
つまりここは侵入不可能な要塞であると同時に、捕えた者を逃さない監獄でもあるのだ。
そして。
比良坂黄泉は現在、そのような監獄の如き場所に連れてこられていた。

「……ずいぶんな仕打ちだな」
抑揚のない平坦な声で黄泉が吐き捨てる。その声にはこの状況に対する不満の念が多分に含まれていたが、しかしそれもむべなるかな。いま彼女の手には手錠が嵌められており、且つその背後には如

何にもと言った風体の屈強な男たちが二人控えている。黄泉が少しでも妙な動きを見せれば即座にこの者らは鎮圧に乗り出すだろう。と言っても、それだけならば何ら問題はない。彼女がその気になれば、小指を動かす程度の力で全てが事足りる。本来ならば。

だが、いまはそれがどうにもできない。ゆえにこうしてされるがままとなっている。

その理由は、やはりこの手錠。外見は通常のそれと変わりないのだが、しかしその本質は似て非なるもの。これは拘束を目的として作られたものではなく、魔術師の生命線である魔力を封じるために生み出された呪宝具（じゅほうぐ）の類なのだ。魔力（それ）を封じられればもう魔術師は何もできない。

如何に優れた機械があろうと動力が無ければただの鉄塊でしかないように、黄泉もいまこの時ばかりは無力な少女と何ら相違ないか弱い存在でしかなかった。そして彼女も、それを承知しているからこそ無駄な抵抗はせず、この状況を不承不承ながらも受け入れているのだ。

それに、この状況を作り出した張本人たる彼は。

「まあまあ、ンーな不貞腐（ふてくさ）れてねえで、もちっと愛想良くしろよ。日本人なら礼節を重んじようぜ」

なあ？　と、元凶――久我遊路は、自身の隣に座っている二〇代半ばの女性に同意を求めた。

いま黄泉らがいる場所は、屋敷の座敷。応接間である。そこで彼女は遊路ら二人と向かい合う形で座し、話し合いを行っていた。

「ええそうね。それには同意見だけど、あなたが言えた義理ではないんじゃないの？　遊路」

「あ――？　オレ愛想いいだろうがよ。ほれ、今だってこうしてちゃァんと笑ってるし」

「馬鹿にしてるようにしか見えないわね」

「気のせいだろ」

ハハッ、と屈託なく笑う遊路。人を小バカにしたような笑みがデ

フォルトの彼は、愛想も悪ければ礼節など欠片も持ち合わせていない、まさに不遜の体現者であった。
そんな彼に呆れたのか、女性は小さくため息を吐き、次いで黄泉に視線を向けて。
「申し遅れたわね。初めまして、九季塚奏恵よ。早々の無礼については謝るわ。御免なさい」
そう、女性――九季塚奏恵と名乗った彼女は頭を下げて謝罪の言を口にした。が、それが上辺だけの虚言であることを黄泉は当然のことながら見抜いている。奏恵の真意が、己れを排斥したくて堪らないのだということを。
しかし、それを看破してなお、彼女は奏恵に敵愾心を抱くことはなかった。
その理由、説明するまでもないだろう。ただ興味がないからである。
ゆえに。
「ああ。別にいいよ。気にしてない」
あっけらかんと、どうでも良いとばかりに黄泉は流した。こんな戯言を聞くために彼女はここにいるのではない。いま遊路が夢中になっている殺し合いにこそ、黄泉は些少とは言え関心を持っているのだ。ゆえ、それ以外のことは取るに足らない些事でしかない。
その意が伝わったのか、はたまた当初からの予定だったのか、ともあれようやく奏恵は本題に移った。
「そう。それはよかったわ。じゃあさっそく一つ質問させてもらうけど、あなた――『円環の蛇』という名を聞いたことはあるかしら？」
「『円環の蛇』？」
わずかに黄泉の表情が怪訝に変わる。
その名が一体何なのかまるで分からなかったから――ではない。十二分に理解しているからこそ、にわかには信じ難かったのだ。彼の魔術師がこのような島国の、しかも特段目を引くものもない至っ

て平凡な市街地に来訪しているなど。
どのような事態に晒されても微塵も心を揺るがさなかった黄泉を、些少とは言え名一つで驚かせた。その事実だけでも、『円環の蛇』なる魔術師が如何に危険かは瞭然だろう。
その黄泉の反応を見た奏恵は、極端に薄いが彼女にも人間らしい感情があったことにホッとしたのか、どこか安堵の笑みを浮かべて。
「ええ。『円環の蛇』冠名（かんめい）を有した不老不死・永劫不滅と謳われる魔術師――イモータル。彼が近頃頻発している殺人事件の首謀者よ」
それは予想外という陳腐な言葉では表せない、まさに規格外級の化物の名であった。
――不死。
読んで字の如く、死が無いというのなら、その存在はもはや神と言っても過言ではない。であれば、殺せぬのだから勝つことなど到底不可能。敗北は必至。
そんな稚児（ちご）でさえ分かる明々白々な結末を前にして、しかし彼は。
「面白そうだろ？　世界（かみ）を自称してるらしいぜ、そいつ。自分は世界（み）なんだから死ぬはずがない、ってよ。マジ痛々しい。極大のバカ野郎だぜ」
と、さも愉快げに呵々と笑っていた。
その自信は、しかし何か勝機を掴んでいるからというわけではないだろう。それは隣の奏恵を見れば容易に窺える。ならば彼のこの余裕は一体何なのか？――そう考えるのが自然なのだろうが、けれど彼の幼少時代を知る黄泉は、すでにその理由に察しがついていた。
――性格、である。
勝算も、打開策も、真実何一つこの閉塞した状況を覆す手立てを彼は持ち合わせていない。にも拘わらずのこの態度は、すなわち性分。忌避すべき絶対の危険を悦とする極度の異常嗜好者であるからに他ならない。
それに、黄泉は変わってないな、と胸中でごちた。
彼は本当に昔と何も変わっていない。無駄に尊大で、やること為

すこと全てが常軌を逸していて、そして危険事に首を突っ込み大怪我を負う。
それは傍から見れば度し難い痴れ者としか映らなかっただろうが、しかし黄泉にとってはそうではなかった。
常に傷だらけとなって死に猛進していく彼の姿は、他の誰よりも凄烈な――
と、遊路がいい加減焦れたのか、身を乗り出して。
「なァ、どうよ黄泉？　お前はこれ聞いて何も思わねえの？　思うよな？　思うに決まってる。男だったら、ＯＫ、上等だぶっ殺してやるよ、って息巻いちまうモンだ」
「……私は女だけど」
「細けえこと気にしてんなよ。っつかお前だって、好きにしろっったろ？　だァから、これはもう決定事項だ。変更は無し。拒否も認めねえ。――比良坂黄泉、お前は今日からオレの相棒だ。一緒に組んで、世のアホ共嬲ろうぜ」
「……」
その誘いに黄泉は即答せず、しばし間を置いた。与えられた情報を整理するためである。
まず奏恵と遊路の関係。
結論から言えば、奏恵は警察の人間である。
世に蔓延る道を踏み外した外道の魔術師共。それらを排除し世の治安を守るために警察に雇われたのが彼女であり、ゆえに警察――国の力もある程度は借り受けることができる立場にあるらしい。そして遊路はその協力者。死線を求めるという彼の性質を考えれば、なるほど確かにこれ以上適した職はまずあるまい。
そして、警察及びあらゆる公的機関の情報網を駆使して敵の正体を探り当てた結果が、現状というわけだ。
本来ならば断るが当然至極のこの選択。しかし、黄泉が選んだ選択は――
「拒否権がないんじゃ、仕方ないな」

――承諾、である。
言葉では強引な幼馴染の勧誘に押し切られ渋々受けたように見えるが、しかしとうの昔に彼女はその心を決めていた。そも、黄泉は彼を探して夜の街を逍遥していたのだから、いまさら遊路との関わりを切ろうなどとするはずもない。
「おっし、ンじゃ奏恵、そういうことでいいよな？」
「……大丈夫なの？」
不安に満ちた声で奏恵が訊ねる。不死であり不滅の存在とされるイモータルの説明の時よりも、さらに沈痛な面持ちで。
しかし、遊路はそんな奏恵に対して。
「大丈夫だよ。オレを信じろって」
変わらずの笑みを浮かべ、そう断言した。
それに、奏恵はしばし逡巡するように目を閉じていたが、ややあって。
「……ええ。分かったわ。これからよろしくね、黄泉」
そう言って、黄泉と握手を交わす。むろん彼女の疑心は完全には消えていないが、けれど私情を挟んでいる状況でもないのだ。使えるものは何でも使わねばならない。
そしてそのことは黄泉も当然察している。己れが信じられていないことを。が、しかし彼女にとっては遊路以外の人間などどうでもいい虫の如き存在でしかない。ゆえにどう思われようが毛ほども興味などなかった。
だが、それでも言うべきことがあるとしたら、それはこれだろう。
「……、手錠（これ）、邪魔なんだけど」
その要求に、奏恵は少し困ったような顔になり、遊路は悪戯を成功させた子供みたいな笑みを浮かべて。
「それの封印式は四八時間経たねえと消えねえんだよ」
「……は？」
「だから、まァ、あれだ。それまで我慢しな」
と、何ともはや無責任にして横暴なことをのたまってきた。

これにはさしもの黄泉と言えど遊路に怒の感情を向けたが、しかしとうの本人はどこ吹く風、やってしまったものは仕方ないだろとばかりに、肩を竦めて笑っている。ああ、反省の色など欠片もない。

それに黄泉は、深く――本当に深く嘆息し。

「もう寝る。部屋、案内してくれ」

疲れ切った精神を慰撫するために、文句を控えて眠ることを選択した。その際、遊路が何やら一緒に寝るだの何だのと言っていたが、それらの申し出を黄泉が無視という形で拒否したのは、もはや言うまでもないことである。

第二話

「……」

機嫌を悪くした黄泉と、それを軽薄な口調で宥める遊路。そんな仲睦まじい二人が部屋から出て行くのを確認すると、途端に奏恵は息を吐き出した。

実は彼女、先程からずっと――それこそ黄泉と顔を合わせたその時から、常に精神を張り詰めていたのだ。

なぜか？

己の失言を防ぐために、そして彼女の動向を見逃さないために。

それらのことに意識を割き続けていたゆえ、弛緩させるとどっと疲労感が込み上げてくる。しばらくは動けそうになかった。

「大丈夫ですか、奏恵様？」

と、それまで沈黙を守っていた黄泉の監視役の一人が、奏恵の身を案じて訊ねてきた。黄泉の監視は、彼女が仲間に加わると口にしたことですでに意味を為さないものとなっている。そのことは彼らも承知なのだろう。ゆえに、奏恵が言うまでもなくその任を解いていた。

「ええ。大丈夫よ。ありがとう」

そう言って、軽く深呼吸し、震えていた心を落ち着かせる。

彼女の噂はずいぶんと前から耳にしていた。いや、というより魔道に身を委ねている者で彼女の名を知らぬ者などまずいまい。仮に知らぬ者がいるのだとしたら、その者は限りなく運の良い幸せ者だ。

奏恵はどうやらそのような強運を持っていなかったらしく、ゆえにあれの存在を知ってしまった。

「……『無謬（むびゅう）の死神』」

畏怖と忌避とが入り混じった声で、その冠名（かんめい）を紡ぐ。

冠名とは、災禍級の力を有する魔術師に与えられる称号、ないし悪名のことである。冠名を有している者は世界規模で見ても数える

ほどしかおらず、ゆえに彼らが魔術師の中でも突出した存在であることは明瞭だろう。そして『無謬の死神』とは、そんな尋常ならざる者らの中においても、さらに危険視される存在であった。

他の冠名所有者は、多少の差異こそあれ至る所で災禍の如く甚大な被害を撒き散らす。確かにそれは悪逆の一言に尽きるが、しかし同時に確たる標的を持たぬがゆえに、万人が全員死ぬわけではない。中には生き残る者も数多く存在する。だが、この死神は違う。ただ自身が興味を持った対象のみをつけ回し、必ず死に至らしめるのだ。それを免れ得た者は皆無。一人としていない。

諸人の観点からすれば恐ろしいのは前者だろうが、けれど個人に限って言えば、畏怖するのは後者であろう。何せ生存の確率が零なのだから。

ゆえに、奏恵は恐れていた。己れに興味を持たれることを。

あれは理屈など通じない極大の人非人、この世に存在してはならぬ最悪の死神なのだ。

そしていまその死神が向ける興味の矛先は……

（……遊路）

己れに力を貸すと言ってくれた、親愛なる同志。自身もまた狂おしいほどの狂気を抱えているにも拘わらず、？道？を踏み外すことなく生きている尊敬すべき者。

彼のことは信用しているが、しかしそれでも時折不安になる。

彼女が纏う死の匂いに、魅せられているのではないのかと。引きずられているのではないのかと。

もし仮にそうであったとしたら……

「……、っ」

不意に、奏恵はその不吉に過ぎる思考を捨て去るようにかぶりを振った。こんな悲観的に物事を考えていても仕方がない。どうにか状況を好転させるためにも、己はできることをやらねばならないだろう。

奏恵は二人の元監視役の男たちに視線を投げて。

「あなたたちは引き続き彼女を監視して頂戴。でもこれまでのように近距離での監視は禁止。気づかれないように――っていうのは無理だろうけど、一定の距離を保ってただその動向を見ていて。それと、分かっていると思うけど、絶対に刺激しては駄目よ？」

いまは遊路が歯止め役となって彼女を抑えているが、しかし何がキッカケでスイッチが入るか分からない。いくら呪宝具で力を抑え込んでいるとは言え、あれを相手に注意し過ぎるということはないだろう。

その意を理解した部下二人が首肯するのを確認すると、奏恵はやおら立ち上がって。

「それじゃあ、私も今日はもう休むわ。あなたたちも、休める時に休んでおきなさいね」

とそう言い残し、部屋を後にした。

◆◆◆

抜けるような紺碧の空。雲一つないその晴天は、世界が今日も穏やかであることを告げているかのようだった――とそう思うのは、平和ボケした蒙昧な輩だけだろう。見る目がある者ならばこう思ったはずだ。

これは嵐の前の静寂――この平穏は後に訪れる災禍の前兆だろうと。

しかし、昨今の諸人はどうにも妄想に耽ることを好んでいるらしく、目が曇っている愚物が非常に多い。

この街で言えば、特にここが顕著だろう。

――ホテル街。

本来睦まじい恋仲たちが愛を語らうために利用する宿泊施設が並ぶその通りは、しかしこの時代においては――特に若者の観点からは――己が欲求を吐き出すためのただの場としてしか認識されていない。

ゆえに、初対面同士であっても利用する者は数多くいる。彼女もその一人だった。

昼間、街を逍遥(しょうよう)しているところを数人の軽薄な男連中に声をかけられ、そのままホテル(ここ)へ。男たちも狂喜乱舞したことだろう。見目麗しい、お嬢様然としたこの少女を抱けるとあっては。

しかし、それゆえに彼らは思いもしなかったはずだ。己れらが、その数分の後に死す運命にあったことなど。

「うーん……やっぱりダメね。艶が出ないわ」

浴室に嘆息交じりの声が響く。入っているのはむろん少女一人だけだ。事の終わりに身を清めるのは何らおかしくはない当然のことだろう。けれど、少女のそれは異常だった。身を清めることが、ではない。身を清めるに当たって使用するものが、常軌を逸しているのである。

すなわち少女が入っている浴槽――その中に溜まっているもの。それは誰もが知る心地の良い湯の類などでは断じてなく、いまし方搾り立てたばかりの生温かい人血だった。

「ったく、本当に男ってのは使えないわね。見た目どころか内側まで役に立たないなんてさ。――あ、あの方は別だけど」

しかしそんな鮮血に塗れた浴槽に身を浸らせながらも、少女はあくまで自然体で他愛のない愚痴を零している。その不自然な自然さこそが、より一層この状況の怪奇さを物語っていた。

「となると、これからも可愛い処女っ娘を捕まえなきゃ、か。でもこの時代の若い娘って女になるの早いからなぁ……それっぽいの攫ってきても、ひん剥くと実はただのビッチでした――とかザラだし。あーあ、何か手っ取り早い方法はないもんかしら？」

そうため息交じりに言いながら、やおら少女はそれを見上げた。

浴室の天井付近。そこにはこの血風呂を作るに当たって使用したと思われる道具――刑具(けいぐ)が何の支えもなく浮かんでいた。それは女性の形を象(かたど)った、鉄製の人形。恐らく知らぬ者などいないであろう世に名高き最悪の拷問処刑具、『鋼鉄の処女(アイアン・メイデン)』。

これは像の前面が左右に開く仕組みとなっており、内部は空洞。左右に開くその扉には内側に向かって伸びている長い釘が無数付けられていて、扉を閉めることで中に閉じ込めた者を串刺しにするのである。

そのおぞましき刑具がいま、ここに三つ。それらのいずれも空隙からは鮮血が流れ出ており、少女が浸かっている血風呂へと滴り落ちている。ああ、まるで犠牲となった者が慟哭(どうこく)しているかのように。

だが、やはり少女――エリザベス・バソリーは微塵も罪過の意識に囚われることなどなく、ただの？物？としてしかそれを見ていなかった。

曰く――処女の血は美容に良い。

それが事実かどうかはこの際問題ではない。ただこの少女はそうと認識しており、そしてそれを実行してしまえる真正の異常者なのだ。

犠牲となった者は数知れず、しかも此度に至っては、ただ？物は試しに？というそれだけの理由で無辜(むこ)の若者を惨殺せしめた。つまり人の命など、彼女にとっては化粧用具にも劣るということだろう。

だが、彼女が街に出ていた理由は何もこれが全てではない。確かに大半はヒマ潰しのそぞろ歩きだったが、しかし同時に敵のアジトを捜すという目的も持っていた。これはその情報を得るついで。まあ結果は見事に外れであったが、けれどそれなりに楽しめたのでエリザベスは怒の念を抱きはしなかった。

そもそもこれは彼女の主君たるイモータル、その魔術(アルカナ)の残滓を内包した人間――滓徒(しと)の役目なのだ。ゆえに、本来ならばあれらの上位者でもあるエリザベスがそこまで躍起になって街を駆けまわる必要性はない。

ならばなぜ行っているのか――その問いは愚問というものだろう。信奉し恋慕するただ一人の男に喜んでもらいたい、褒めてもらいたい――ただそれだけ。

だがそのためならば、エリザベス・バソリーは如何な凶行をも微

塵も躊躇なく為すだろう。
と――エリザベスが不意に立ち上がる。
外見はまだ成熟していない子供のそれだが、しかしその陶器のように滑らかにして白い肌と纏う妖艶な空気は数多の男を虜にする魔女の婀娜(あだ)の如く、ただ底抜けに淫靡であった。
「……そう。見つけたの」
唐突に、何の脈絡もない言を口にするエリザベス。その表情は激甚なる憎悪と極大の歓喜――それぞれ相反する感情が入り混じった、まさに狂気の面貌だった。
「手柄を取られたのは癪だけど、まあいいわ。良くやったって褒めてあげる。私がそこに行くまでそこにいなさい」
いまエリザベス・バソリーの視覚はここではない別の場所を捉えている。それは昨夜イモータルが街に放った彼の滓徒、その一匹の視界。彼女はその滓徒と視覚を同調させているのだ。
そこに映されているのは、戦国時代からそのまま時を越えてきたかのような和風建築の広大な面積を持つ武家屋敷。滓徒の目を介して視ているゆえ不鮮明甚だしいが、しかしそれでもあそこに何かしらの魔術式が張られていることは分かる。となれば、まず間違いなくあれが奴らの――あの不遜なる塵共の拠点と見て間違いないだろう。
ならば。
「へえ……戦場とするには相応しい場所ね。でも死に場所にはしてあげない。塵は塵らしく、泥濘(でいねい)の底で果てるがいいわ」
あの軽薄な白髪の男も、あの幽鬼のような黒髪の女も、絶対に人のまま終わらせなどしない。己れらが如何に矮小な存在であり罪深い愚者であったか、文字通り骨の髄まで教えてやる――そうエリザベスは胸中で断じ、くつくつと喉を鳴らして凄惨な笑みを浮かべていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9109y/

幻想のアルカナ

2011年12月11日09時53分発行